

マインドマップについて

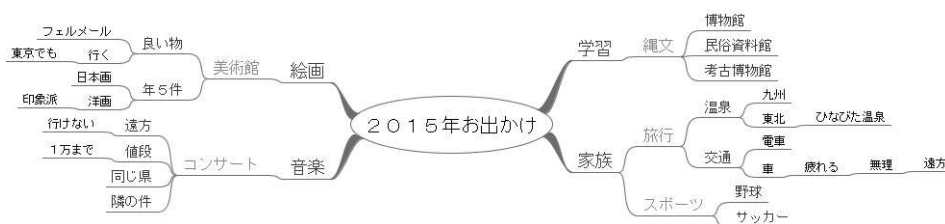
マインドマップ

マインドマップはトニー・ブザンが提唱した思考整理ツールです。

基本的な作成ルールは、分析／表現したい紙の真ん中にテーマを書き、そこから枝をのびして関連するキーワードや想起されるイメージを連ねてゆくものです。結果的に放射状のマップが出来上がります。

下図に例をあげます。ここでは、モノクロですが、各枝と文章にカラフルな色が使われています。例はパソコンで作ったものですが、手書きで絵を入れて、脳に訴えるように書くのが本式です。

図1 マインドマップのイメージ



マインドマップのキーワードやイメージを繋げていく表現方法は、脳が物事を記憶・分析する方法に近いと言われています。

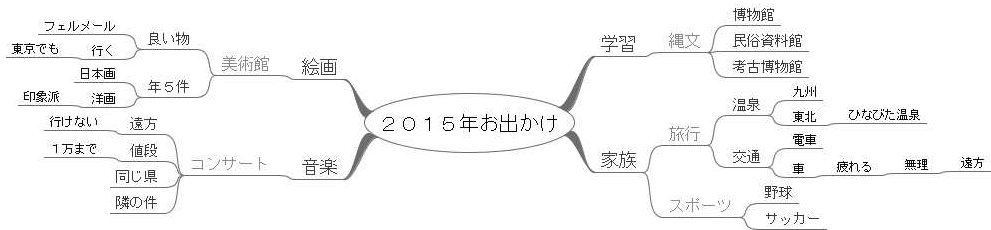
議論をまとめたり、アイデア出しに使ったり、個人の生活や仕事のいろいろな場面で使うことができます。

トニー・ブザンの本では、学習に使った例が紹介されており、これを使って成績アップした子供もかなりあるように書かれています。

トニー・ブザンの方法は、基本的には紙に手書きで、絵とか図を使い、線などにカラフル色をふんだんに使い、感覚に訴えてゆく方法であると思います。

私は、このトニー・ブザンの方法は本で読んだだけで、実際には、FreeMind (フリーマインド) というフリーソフトを使っています。前掲の図は、そのソフトで作ったものです。次ページに、再度、掲げます。

図 2



マインドマップでは中心をルートノードと言い、中心トピックを書くことになっています。

ここでは、ルートノードのトピックは「2015年お出かけ」となります。

枝分かれしている項目を子ノードと言い、階層があります。例えば、ルートノードの子である「家族」は第1階層であり、それらの子の「旅行」、「スポーツ」は第2階層です。

「旅行」の子は第3階層になりますが、同じレベルの「温泉」「交通」と2つの子があり兄弟ノードとなっています。

図はモノクロですが、実際には、第一階層の文字は青色、第二階層は緑色、第三階層は茶色、その他は黒色が使われています。

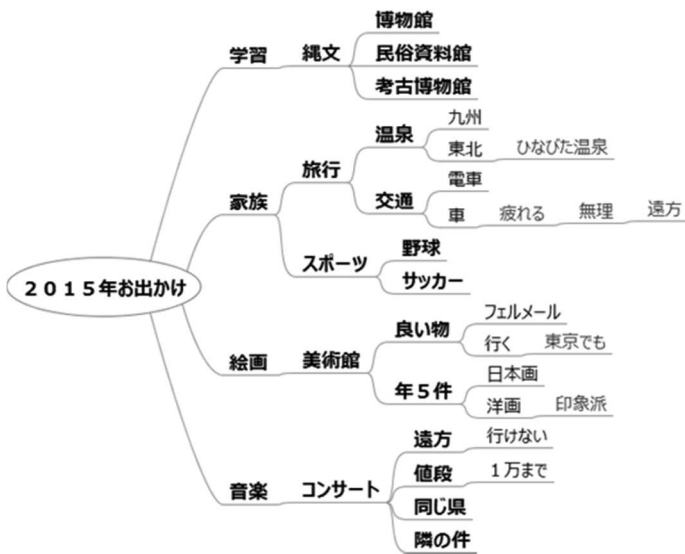
本書でのマインドマップ

本書では、モノクロしか扱えませんので、本書の形式としては、字の大きさ、太字、色などで階層を表すことにしました。

前掲のマインドマップを本書の形式にするには、まず図3のように枝を右に寄せます。

本にはページの行数が限られていますので、1ページに収まるようにマップを分解します。

図3 枝を右に寄せた状態



分解するためには、例えば、図3であれば、第一レベルを大項目とみなし、図4のように、見出し的に使います。

そして、第2レベルを第1レベル、第3レベルを第2レベルのようにレベルをあげます。

ルートノードは大見出しに当たるので、マップから外して表題として書くようにしました。

マインドマップにはルートノードが必要ですから、1、2、3・・・の順番番号をルートノードとしています。

図4 本書で使っている形式

